

## 茅盾と上海 上海近現代文化紀事ノート(一)

齋藤 匡史

本稿は作家－茅盾の文学活動や文学的足跡を論証するものではなく、その文学作品を評論するものでもない。生活者としての茅盾の上海での生活拠点を辿りつつ、その上海観の一端を探り、この時代の上海の記録を試みるものである。

### 京都田中高原町

朝目が覚めると、豆腐売りのラッパが窓の外で「ふうーふうー」と鳴るのが聞こえた。

毎回このラッパの音が私を少なからず悄然とさせるのだ。

その低くすすり泣くような音が私の流浪者としての郷愁を呼ぶからというのではない。そうではない。故郷を失い、祖国も失ってしまった私のような outcast には、所謂「郷愁」という類の優雅な情緒は、めったに心にわきあがることはないのだ。

(……中略……)

だからこの悄然とした気分を言葉にするのが難しい。だがこの「ふうーふうー」という音を聞くにつけ、胸中に起伏する悄然とした気持ちをいつも押さえ切れない。

(……中略……)

「ふうーふうー」の音は凍てついた空気に響き渡り、窓の向こうを過ぎ去って行った。わたしは静かに耳を澄まし、この単調な「ふうーふうー」の音から無数の言葉を読み取った様にも思えた。

私は不意に障子を開けて、向こうの空を眺めた。何が見えたのか。見えたのは空いっぱいの白い物悲しさを感じさせる霧であった。

これは茅盾(沈雁冰)が京都滞在中に筆にした随筆『豆腐売りのラッパ』(原題『賣豆腐的哨子』、全文約700字余り)の引用者抄訳で、1929年2月10日発行の『小説月報』第20巻2号に掲載されたものである。

茅盾が京都に至るまでの経緯を簡述すると、1916年8月、北京大学予科を卒業し、紹介により上海の商務印書館編訳所に編集者として勤め、五四運動の中、マルクス主義の洗礼を受けた。1921年2月から3月に上海共産主義小組に入り、同年7月の中国共産党成立を以って正式党员と

なった。1925年、国共合作により広州に赴き、国民党中央宣伝部秘書としての責を果たし、国民政府の北遷にともない武漢に赴いた。しかし蒋介石、汪精衛の相次ぐ反共クーデターで南昌に退避するが、途中九江で足止めにあい、仕方なく1927年8月上海に戻るも国民党の逮捕令により、潜伏を余儀なくされた。この時から「茅盾」（当初は「矛盾」）のペンネームで生活のためからも創作活動を始めた。自伝『我走过的道路』<sup>註1</sup>の「亡命生活」によれば、景雲里の自宅に十ヶ月間「潜伏（原語－隠蔽）」したが、隣家に住む周建人、葉聖陶とは往来があり、10月には魯迅も廈門から戻り、景雲里に住むようになり、行き来が始まった。

こうした「潜伏」中、生活環境を変えて仕事をするようにとの陳望道の勧めで1927（昭和3）年7月初、神戸行きの客船に乗りこんだ（当時、日中間の渡航は双方とも旅券が不要であったと記されている）。東京に5ヶ月暮らし、同年12月、楊賢江（商務印書館の同僚、中共黨員）夫婦の住む京都市左京区田中高原町に移り住んだ。この家は八畳4間で、1室を茅盾が、もう1室を立命館（原文－立教大学、茅盾の記憶違いと想像する）に留学中の中国人兄弟が使い、他の2室は空きのままであったという。この家は「田中池」という小さな池に面して建てられ、洛北の山々が望めたという。

20年も以前になるが、「現在は東高原町、高原町、西高原町と三つに 当時は田中高原町。西側に京福電鉄叡山線 東側に疎水、疎水に近い方に田中池があり、池の端に二階建ての長屋ともう一棟建物がある」という『薄明の文学』（松井博光著）<sup>註2</sup>の記述の抜書きを頼りに、筆者は冬のある日の午後、この洛北の住宅街に茅盾の足跡をたどったことがある。この地で茅盾は十数編の散文、随筆を執筆しており、「大革命」失敗後の暗澹たる心の機微を異国の生活風景に寄せて吐露したのであった。特に『豆腐売りのラッパ』は、この八畳間から窓の外を写したもので、茅盾の心情が明確に読み取れる作品である。足跡辿りはそれまでであったが、黄昏時の洛北を洛中に向かって二、三筋を過ぎたところで、「ピープラー」と豆腐売りのラッパが突然耳に入ってきた。空耳かと耳を澄ませば確かに、立て続けに「ピープラー」と聞こえた。音の方へ急いでみると、そこには実際に豆腐屋があり、夕餉の支度が始まる街へ豆腐屋の自転車が繰り出していったところであった。

その進軍ラッパ（原文－軍筋）のようだが、甚だ小さく悲壮に響き渡る音が、別のはかなく消え去った過去を思い起こさせるのだった。 『豆腐売りのラッパ』より

国民政府の北伐軍は破竹の勢いで軍閥勢力を打ち破り北上、武漢まで到達したとき、「国民革命」の夢は無残にも打ち砕かれた。各地の戦闘で聞いた国民革命軍の勇ましい突撃ラッパをこの時、記憶の遠くに重ねたのかもしれない。茅盾にとって田中高原町はあまりにも静かで、あまりに物悲しい所であった。亡命を前に最後に暮した上海の景雲里の騒々しさに、「創作にとって良

い環境とはいえない]、「自分はまだいい、日中に物を書くから。しかし夜に仕事をする習慣のある魯迅にとっては大問題だった」註3 と辟易した茅盾であったが、実際には長編『蝕』三部作（『幻滅』、『動搖』、『追求』）、短編『創造』ほか、文芸論文、散文、神話研究、翻訳など立続けに創作の成果を上げている。皮肉にも大革命の挫折が茅盾を創作の世界へ導いた形になった訳である。田中高原町は景雲里とは比べようも無い「静寂」と時間があり、仕事に打ち込んではいるが、それはあくまで「仮の宿」の「仮の姿」であって生活の愉悦は伝わらない。

茅盾が初めて上海を訪れたのは1913年7月(17歳)で、杭州私立安定中学を卒業して、北京大学予科第一類を受験するためであった(上海では親類の乾物店に世話になっている)。京師大学堂から改称後初めて予科生募集があり、上海での初めての募集でもあったという。この募集を知ったのは茅盾の母親で、定期購読していた上海『申報』紙の募集広告からである。合格通知を受け取り、7月中旬、父親の叔父の家に滞在し、数日後、天津行きの船上の客となった。この2度の上海行きで、茅盾は城隍廟と書店数軒を回っただけであった(『我走过的道路』)。

奇しくもこの2ヶ月後、長兄の公務出張に従い日本に留学する17歳の郁達夫が上海港から旅立っている。この時の郁達夫の初めて接した大都会—上海に対する印象は鮮烈なものがあり、『わが夢わが青春』(1934年12月執筆)に「社会の本然の姿、人間の正しい道は、なんとしてもここにはない」註4と言わしめた上海であった。しかし郁達夫のこの言葉は、裏返せばこの「冒険家の樂園」、「不夜城」の存在に対する大いなる興味を示したものであったと推察する。しかし茅盾の『我走过的道路』は、発表開始が1979年という時代の制約があるが、この自伝は約20年に及ぶ上海での自己の生活の叙述は最小限に留まり、「公人」としての活動記録、政治活動、創作や文学活動にほとんど紙幅を費やし、一生活者としての姿やその生活状況が見えにくく、やや人間味に欠けると言わざるをえない。そうした中、二度程この街に対する感慨を記した部分がある。

それは1937年7月の日中全面戦争開始後、8月13日、上海でも日本海軍陸戦隊と中国軍との3ヶ月に及ぶ激戦がはじまり、11月、中国軍の撤退により、上海は租界を除き日本軍占領下に置かれた。ジェスフィールド路(現—万航渡路)信義村の自宅から脱出し、フランス租界の友人宅に身を寄せる。年末ようやく香港行きの乗船券を入手し、上海を脱出した時の回想である。

一九三七年除夕，我和德沚登上了去香港的轮船，离别了曾经生活，工作和战斗了二十年的上海。上海可以说是我的第二故乡，在这里我开始了对人生真谛的探索，也是在这里我选择了庄严的工作。现在我要离去了，为了祖国的神圣的事业。但是我还要回来的，一定会回来！（1937年大晦日、私は德沚と香港行きの船に乗り、20年間生活し仕事をし戦った上海を離れた。上海は私の第二の故郷と言える。ここで私は人生の真の意義の探索を始めたし、ここで厳粛な仕事を選択したのである。いま私は祖国の神聖な事業のために離れなければならない。だが私はまた戻ってくるのだ。必ず戻ってくるのだ！）註5

茅盾は上海を「第二の故郷」と呼んだが、半世紀近くも以前の情景を回想し筆にしたもので、このくだりはやや公式的に思えるし硬い。上海の街への愛着というよりは、民族の存亡を賭けた抗日運動の開始への激昂が読み取れる。いま一つは1946年5月26日、抗日戦勝利後、香港から海路上海に戻った際、船上から捉えた上海の姿である。

闊別八年の上海灘，又呈现在眼前了。表面看来，似乎一切都没有变，喧嚣的南京路，盛装的少女，街角落里的小瘪三，夜总会里的爵士乐，黄浦江上的军舰，……都与八年前一样，……（八年もの長い間離れていた上海の街が、再び目の前に現れた。表面上は一切何の変化も無い様に見える。喧騒の南京路、盛装の少女、街角の物乞い、ナイトクラブのジャズ、黄浦江の軍艦、…皆八年前と同じだ…）<sup>註6</sup>

こちらは淡々とした記述ながら、文学活動と生活の拠点として、永年慣れ親しんだ上海の街への愛着が十分読みとれよう。「上海」と言わず「上海灘」という言葉を使った。「上海灘」には二つの意味がある。一つは貶意で上海の街や社会を猥雑で軽薄なものとして軽い揶揄が込められるもの、いま一つは褒意で貶意の裏返しからくるこの街への愛着を込めた呼称である。「闊別八年」という定語から当然、茅盾のこの街に対する感情の一端が出ている。

## 茅盾—生活拠点としての上海

茅盾の上海生活は、

- ①1916年8月の商務印書館入社から1927年1月武漢赴任までの10年5ヶ月
- ②1927年8月末から1928年7月の日本亡命までの約11ヶ月
- ③1930年4月の帰国から1937年12月の日本軍の上海攻撃による長沙への避難まで7年8ヶ月
- ④1946年5月26日香港から上海に戻り1947年12月末の香港行きまでの1年7ヶ月

このように前後4回、延べ約20年あまりに及ぶ。ここでは茅盾の生活拠点としての住宅（居住地）について論考しつつ、その上海観の一端を検証する。

- ① 1916年8月の商務印書館入社から1926年1月広州赴任までの約9年半

茅盾の最初の居住地は、閘北宝山路の商務印書館総廠（編訳所英文部）付近の「半洋式二階建ての建物」で、これは商務印書館の職員が住む賄いつきアパートであった。部屋は四、五人1室と一、二人1室があったが、大部屋に三人で住んでいる。この1年間は宝山路の付近しか出歩かなかったという。1918年郷里の浙江省桐郷県烏鎮で親の決めた親戚の孔徳沚と結婚、単身上海に戻る。1919年3月、三人部屋では仕事はかどらず、宿舍の支配人に頼み宿舍の門の

横の小屋を100元も自腹を切り修繕改装してひとり住まいをする。茅盾の月給は、入社当初の5ヶ月間は24円で、17年1月から30元となり、1919年に50元、そのほか原稿料収入が月々40元ほどであった。1920年1月から給与は10元あがって60元となっている(1921年から『小説月報』の主編となり、月給は100元となる)。母親から家を探せの催促があり、再び宿舍の支配人に家探しを頼んだ。

家探しの条件は、一、商務編訳所付近であること、二、家は台所、亭子間（物置部屋一筆者注、以下同様）のほかに三室あること。自分の計算では三室は最低限度だった。一階は客間兼食堂、二階の1部屋は母の寝室、1部屋は自分と徳沚の寝室である。福生（支配人）が十日探しても見つからなかった。当時宝山路付近の賃貸は二種類の規格しかなく、一つは「一樓一底」（上下各一間の二階建て）で台所と亭子間つき。二つは「兩樓兩底」（上下各二間の二階建て）で、台所や亭子間のずっと大きいもの。私が求めていたのは、上海人が言う「一樓一底帶過街樓」というもので、非常に少なかった。「過街樓」というのは二棟の家の間に通り道があり、建築士はこの特徴を利用し「一樓一底」の上階に一間横に継ぎ足し、通り道を跨ぎ、隣の棟と壁で接する建て物である。この「過街樓」は南北両方に窓があり、陽も充分入り、空気の流れが良く、夏も割に涼しいのである。<sup>註7</sup>

『上海弄堂』の「弄堂沿革」<sup>註8</sup>によれば、木造簡易集合住宅が19世紀中葉に賃貸住宅として出現し、火災予防の見地から租界当局によって禁止される。その後木材の梁や柱に煉瓦を積んだ江南地方の伝統的な住宅—いわゆる「老式石庫門里弄住宅」がこれに取って代わった。20世紀に入り、人口の爆発的増加、都市の拡大により不動産業が繁栄した。しかし集合住宅の一棟あたりの面積は狭くなり、西洋建築の影響をうけた外観が好まれるようになる—いわゆる「新式石庫門里弄住宅」の出現である。さらに1920年代は、人口増による地価の高騰で3階建ての石庫門が出現すると同時に西洋のアパート建築の様式を取り入れ、玄関前に庭の付いた「新式里弄」と集合住宅ながら一戸建て風の洋館里弄とマンション（公寓）が出現したと言う。茅盾が探していた「一樓一底帶過街樓」は、このうち新式石庫門弄堂住宅の一種であった。ところで「一樓一底」、「兩樓兩底」といった呼称は、こうした上海独特の里弄住宅を表わすもので、所謂「外地人」には説明が必要である。茅盾の自伝にもそれを意識してかこの部分の叙述が詳細である。ちなみに「樓」は「上樓」、「底」は「底樓」の意である。

1921年春、宿舍の支配人は、商務に極めて近い鴻興路（宝山路が上海北駅を過ぎ200mほどで鴻興路と分岐する。後の1926年、この角の三德里に泰東書局から独立した創造社出版部が置かれる）「鴻興坊」に茅盾が望んだ家を探し出した。この家の元の借り主は、室内の電気配線や電灯は自分がつけたのだからその費用を弁済しなければ、外してしまうと言い、その要求額はどうか

えても通常の5、6倍の150元余りだったが、条件にあった家は少なく仕方なく支払ったという。『小説月報』の革新、文学研究会の設立に忙しかったころのことである。

『我走过的道路』の上巻262頁に、1925年の「五三〇運動」当時「順泰里」（所在地不詳）に住んでいたとなっており（この時隣に瞿秋白が住んでいたと述べる）、転居の記述は特にないが、明らかに「鴻興坊」から転居していると思われる。『上海路名大全』（1982年12月出版）によれば、「鴻興坊」は見当たらず、「鴻興里」ならば鴻興路178弄に存在する。また「順泰里」は滬西の愚園路と交差する現一鎮寧路83弄（「順泰里」は武定路にもある）に存在したがこの「順泰里」は閘北宝山路の商務印書館からは遠すぎる。茅盾の記憶違いで、もしも「順興里」だとすれば（現一虬江路159弄、宝山路をはさんで東西に延びる）、商務にも近い。

② 1927年9月－1928年4月、閘北横浜路景雲里11号半

「大革命」挫折後、南昌に向かおうとしたが、九江で足止めに合い、仕方なく上海に戻った。しかし国民政府の逮捕令により「潜伏」せざるを得なくなり、商務印書館総廠のある宝山路の400mほど北の横浜路を東に曲がってすぐにあった「景雲里11号半」に身を寄せた。魯迅の弟の周建人、葉聖陶、魯迅も後にここに住んだ。現在は弄堂の入口に葉聖陶のレリーフが掲げられている。弄堂住宅としてはそう規模は大きくない。また1930年3月、左翼作家連盟の成立大会が開催された「中華芸術大学」がすぐ裏手になる。前述の日本亡命まで外出せず、この3階の正房で創作に励んだ訳である。

③ 1930年4月5日から半月、フランス租界某路の楊賢江宅

1930年5月頃－1930年7月初旬まで、公共租界静安寺の東、三階建ての新築住宅

1930年7月－1932年春、愚園路口、樹德里の三階建て家屋の三階

1932年4月－1935年3月、虹口施高塔路（現一山陰路）大陸新邨三弄9号

1935年3月中旬、極司菲爾路（旧越界築路区、現一万航渡路）信義村一弄1号

1930年4月5日、日本から帰国したが、人目を避け、フランス租界にある友人（楊賢江）宅にひとまず旅装を解く。景雲里には母親と妻子を残したままであったので、密かに会いに行った。ここは半月住んだがいつまでも住み続けるわけにも行かず、家探しを始める。茅盾の家探しと言えば『上海』（1934年1月1日刊『中学生』誌に掲載）がある。これはいわば家探しに名を借りた茅盾なりの上海市民の生活状況の記述であり、この時の事が題材になっているものと見られる。『上海』はフィクションであり、田舎から上海に職探しにでてきた「私」が友人の案内でまず住居を探すという設定で、上海の居住環境とそこで生活する底辺の人々の状況を「私」の眼を通し、この街に生きることの困難さを語る。

「私」は電柱の張り紙を頼りにまず外観が立派な石庫門住宅を訪ねる。門を入り中庭（原文

「天井」—吳方言)を見るとガラクタでいっぱい、客間は旧式家具の横に長机を二つならべた臨時の寝台に車夫が寝ていた。二階へと上がる階段の途中に箱型の小部屋が設えてあり、そこから寝ている女性の足が露出していた。そこかしこから咳をする音、子供の泣き声がし、一階の勝手口から出るとき台所に少なくとも5つも豆炭コンロが並んでいた。家主は又貸し家主だった。「私」は友人と何軒か見てまわるが、どこもギョウギョウ詰めと同じ状態で、友人の口を借りて上海の居住環境を語らせる。「上海の人口は300万人だそうだが(1928年人口約360万人——引用者註)、ごく少数の人間が大きく立派な洋館に住んでいる。そこには確かに空き部屋があり、それも沢山空いている。しかしそれを貸すことは絶対に無い。これ以外の残りの90%の上海人はこんなサーディンを詰めるように詰め込まれているんだ。部屋代が高すぎるからさ。だからふつう上海人は『住』にはこだわらないのさ。これ以外に閘北の貧民窟だってあるんだ」。統計数字を持ち出すまでもなく、これは極論であり中流階層の居住条件は矛盾自身の住環境を見てもそう悪くないことが明白である。矛盾は社会正義を強く意識し、政治的理想がその思考の根幹にあるためやや教条的、機械的な側面がある事は否めない。後述するが、それがのちの代表作となった長編小説『子夜』にも欠点として現れる。

「私」は新式住宅の部屋も見たが、浴室を普通の部屋に改装し又貸しするもので、浴室が不要なら最初から浴室の無い物件を借りればとの疑問に、友人は、旧式の手ごろな家が見付からず仕方なく新式の家を借りその一部を又貸しし家賃の足しにしていると説明する。

その後「私」は旧式里弄住宅の築20年の「一樓一底」の台所の上に設えた家賃10元の部屋を借りた。周囲は新式の三階建て住宅が立ち並ぶが家賃が高いため大半は空きのまま、かたや旧い上下で二間の家屋には、3世帯から5世帯が暮らす。家主は又貸し家主で、以前借りて住んでいた家を大家が取り壊し新築するため、仕方なく高利貸から借金をし、400円で今の家を借り、又貸ししている。又貸し家主は電車会社の検札員である。他の住人は、阿片を吸う「紅丸(モルヒネと硝酸の化合物で阿片より廉価な麻薬、非合法)」の密売人で元教師のやせた男、証券交易所のブローカーの助手の男とその家族が住んでいた。この証券交易所の男から月給30、40元の仕事は現時点では良いかもしれないが、物価の上昇で支出が増え、副業が無ければ上海では生活していけないから、田舎に帰るよう諭される。就職口探しをこの男に頼む一方、証券交易所を見学し、ここで行われていることは、銀行に操られた仲買人がさらに助手を操り公債の「投機」を行っており、銀行の預金の多くは田舎から戦乱を逃れてきた人々のカネを吸収したものだと言われている。「私」に言わせている。このほか又貸し大家の小学4年の息子と「一樓一底」の民家を改造した「弄堂小学」の状況、上海ならではの「連環画」の街頭貸し本屋の紹介がなされる。仕事口探しはもう一週間待たされる事になった「私」に「已经叫我了解上海是怎样一个地方，而上海生活又是怎样一种生活了(もう上海がどんなところか、そして上海生活がどんなものか、私には分かった)」と言わさしめるのである。「私」の視点を借り、全体として都市下層市民への理解と同情、都市生活者の

適応能力への驚嘆を述べるが、居住空間の劣悪さ、生存の糧を求めることの難しさ等、物理的条件に偏った上海生活への否定的見解、つまり上海の下層市民はこの街での暮らしを享受する状況にはないという印象を与えている。

ならば何故多くの人々がこの都市空間をわざわざ求めて上海へとやって来るのか。当然上海が人々に与えてくれるであろう魅力、それが最低の生存のための就業であったとしても、封建的な身分関係や倫理道徳観にとらわれない、中国の他の地域には存在し得ない「自由性」、「開放感」があったはずだ。例えば都市生活の享楽、様々な商品・食品、娯楽的文化的消費、国際都市としての繁栄、政治経済文化の種々の情報、上海ドリーム実現の可能性、多方面にわたる就業選択肢、居住、教育の自由等々である。

上海は戦乱や農村荒廃による流入人口の増大があった一方、近代産業の発展による職員労働者の吸収も旺盛であった。難民ではない「移民」の受け入れによってこの街は成長を遂げてきたのも事実である。茅盾自身も近代出版業の発展によりこの街に職を得たひとりである。日本亡命前、景雲里の自宅で陳独秀との上海語談義の中で、もはや上海語は寧波語や蘇州語の影響を多く受け変化し、元々の上海語は浦東語にしか残っていないと茅盾自身が語ったとおり、「移民」で成り立った街なのである。

1920年代末から1935年にかけて行われた上海市社会局による労働者世帯305世帯のサンプリング調査<sup>註9</sup>によれば、305世帯のうち二階建て以上に住む世帯が60%、平屋が34%、アンペラ小屋が6%。うち一間が47%、二間が42.6%、三間かそれ以上が9.8%で、一世帯当たり平均1.65間であったと報告されている。一世帯当たりの平均年家賃は37.83元（月額3.15元）で生活費支出の8.3%を当てている。ちなみに年平均支出は454.38元（月額37.86元）で、うち食費53.2%、被服費7.5%、燃料費6.4%、雑費（交通、教育、衛生、水代、娯楽、宗教、交際、修理、税、利息、医薬等）24.6%（112元）となっていることから分かるように茅盾の『上海』は、決して住環境の全体像を反映したものではない。

固よりロマンチストの郁達夫とリアリストの茅盾を比較することは酷なことかも知れないが、郁達夫の小説『春風沈酔的晚上』（1924）の主人公も上海で職探し中の青年で、旧式の里弄住宅の二階一間を仕切って二間にした部屋を月3元程で借りている。奥の部屋の煙草工場の女工との恋にも至らぬ仄かな恋慕が描かれ、決して物質的には豊かでないが都市空間での生活を享受する姿が表現される。解せないのは『上海』の主人公が台所の上に増設した部屋を10元（又貸し家主は、他なら14元はすると言う）で借りた事になっているが、繁華な地段で借りた（これも考えにくい）としても現実的数字ではない。茅盾が1933年4月に入居した大陸新邨が60元（1931年、大陸銀行上海信託部が投資して6弄50戸を建設。欧州から輸入した煉瓦や建材を使用、ガス、浴室設備付きの赤煉瓦3階建高級テラスハウス、一戸222平米<sup>註10</sup>）であることから考えても、茅盾が本当に底辺の暮らしを熟知していたのか、または意図的に高い家賃を言ったのか疑問が残るところで



ある。また一二八事件の経済危機を除けば、1920、30年代の上海の物価は比較的安定していたと言う。

この時の茅盾の家探しの条件は、「租界の中だが繁華な地区でない、部屋数が十分で、家賃の安い」というもので、公共租界静安寺の東側、三階建ての新築住宅（1930年5月頃－1930年7月初旬）を日本に亡命した時の偽名「方保宗」で借りている。転居後程なくして、詩人の徐志摩がアグネス・スメドレーを伴ってやって来て、ここからスメドレーとの交流が始まった。しかしこの家は二ヶ月で家賃が負担になり、すぐまた静安寺付近の愚園路口、樹德里にある三階建ての石庫門住宅の三階に転居する（1930年7月－1933年春。母親は郷里に戻った）。この三階は三間あった。商務印書館を離れる際、主編となった鄭振鐸から900元の小切手と時価200元の社債を退職金として受け取ったが、この後は原稿料収入しかなく、日本亡命中も母親、夫人と子供たちは景雲里（茅盾不在時は三階部分を又貸し）で暮らし続けた。貯金も当然あったであろうが、新築の一軒家を借りる金銭感覚に首を傾げたくなる（商務入社後の一年間で貯めた200元を母親と弟との旅行で全て使い果たしている）。左聯参加の頃であった。

この秋頃、眼病、胃病、神経衰弱を患い、読書も執筆もできなくなり、退屈凌ぎに叔父の公館（盧学溥、交通銀行董事長、浙江実業銀行の大株主、南京政府が上海造幣廠長に任命）に出入りし、そこに出入りする実業界の面々から政治や経済の状況についての知識を得、中国社会の現実を反映したと言われる長編小説『子夜』執筆のモチーフが生まれる。一年余りの構想の後、1931年10月に執筆を開始し、1932年12月5日に脱稿した。翌年1月から『小説月報』に連載が予定されたが、一二八事件の日本軍の攻撃により、原稿を保管していた商務印書館総廠が焼けてしまった。幸い妻の孔徳沚が写しを取ってあったので、1月開明書店より単行本として出版、初版3千部が瞬く間に完売し、三ヶ月で四刷、計2万3千部、印税はこの当時普通15%（千字10元の稿料方式で計算すれば、30数万字であるから3000元）、定価は未確認だが1元（0.7元の叢書が多くあった）としても3450元にもなる。

この時4月、魯迅が北四川路のラモスアパートから施高塔路の大陸新邨一弄9号（内山書店の裏手を北に200m）に転居したので祝いに行った。その時魯迅から大陸新邨へ転居するよう勧められた。

愚園路口樹德里的三楼上我已经住了两年半，按照“地下生活”的规则，一地不宜久住，我早就有搬家的想法，但一时找不到既实用又经济的房子。（愚園路口的樹德里の三階に住んで二年半になろうとしていた。「地下生活」の原則から言えば、一個所に長く住むのは宜しくないのので、転居の考えを持っていた。しかし便利で経済的な家が見つからなかったのだ。）<sup>註11</sup>

こうして茅盾は「沈明甫」と名乗り、「経済的」とは言い難い家賃60元の高級テラスハウス

大陸新邨三弄9号（1933年4月－1935年3月）に転居する。『子夜』の印税収入の経済的裏付けがあったことは言うまでもない。しかしその後、この住まいを知る人が増えたこと、図書雑誌の検閲が始まり稿料が減少したこと、故郷烏鎮の実家の改築に大きな出費をしたことにより（1000元近く）、60元の家賃が負担となっていた。たまたま黎烈文（1904－1972、作家。商務の同僚、この時『申報・自由談』の編集長、1946年台湾大学教授）からの招きで魯迅と共に極司非爾路（現一万航渡路）信義村という新興住宅地にある黎宅（電話があって便利だったと茅盾は書き記している）を訪れた。信義村は所謂「越界築路（租界当局が租界の外に道路を延ばし、その管轄権を国民政府から移譲されたもの）」の一つ、極司非爾路（ジェスフィールド路）の北、曹家渡にあった。市中心から離れ静かであり、また「準租界」（実際には1932年10月租界工部局は越界路地区を中国側に返還している）でもあり、家賃も40元であった。信義村は全部で三弄20数戸、各戸「兩樓兩底」で庭付きの新築で、まだ空き家が多くあったと言う。1935年3月中旬、信義村一弄1号の黎烈文の隣に移転し、1937年8月の日本軍の呉淞口上陸、国民政府軍が上海を撤退した11月（10月に二人の子供は長沙へ避難させた）、租界以外は全て日本軍の手に落ちたため、租界の友人宅に身を寄せ、この年の年末、上海を離れ香港に向かった。

④ 1946年5月－1947年11月、大陸新邨6号

抗日戦勝利後、八年半ぶりに海路上海にもどった茅盾夫妻は、夫人の弟の友人の好意で大陸新邨一弄6号の二階の一間を借り受けることができた。かつての魯迅邸の一つ隣である。

后来我听说，八年来上海的住房面积未增一平方米，而人口却增加了近两倍。原来一户中等收入的人家可以住一栋小楼，而现在能占有一层楼已算万幸了。（後で聞いたのだが、この八年来上海の住宅面積は一平米も増えておらず、人口は倍になっている。以前なら中くらいの収入の人なら一軒家に住めたのだが、今では一階分を確保できればありがたいのだと）註12

上海生活は内戦によりわずか半年余りで終わりを告げ、再び船上の客となり香港に向かった。茅盾の上海生活はここで終わりを告げた。

茅盾の自伝は前述のように発表時期は、まだ政治的緊張と思想的呪縛の中にあつたし、対外的にも影響の大きい作家であつたため自由闊達に記述することは不可能であつたことは推察に難くないし、党の決定や歴史評価から外れることは許されなかつたはずだ。そうした要因がこの自伝を「硬い」ものにしてている。さらに彼自身の「革命家、共産黨員」という生真面目な性格も記述に滲み出ている。その上海に対する理解と認識は、長編小説『子夜』、小説体随筆『上海一大都市之一』を見なければならない。

## 長編小説『子夜』と上海

日が地平線に沈んだばかりだ。そよ風が思い出したように吹く。…蘇州河のよどんだ水が金緑色に変わり、流されるときも西へ逆流している。いつのまにか黄浦江が上げ潮になったのだ。蘇州河の両岸にもやっている大小さまざまな船がみな浮きあがって、甲板が岸壁より五寸ほど高くなっている。風に送られてパブリック・ガーデンの音楽がきこえてくる。とりわけ豆をいるようなティンパニーの音が大きくひびき、心をうきうきさせる。夕もやと霧がごちゃまぜにたなびいて、ガーデン・ブリッジの高い鉄索がおぼろにしか見えない。電車が通るたびに、その下に張り渡されている架線から緑色の火花が散る。橋の上から東のほうを眺めると、浦東にならんでいる倉庫が、巨大な怪獣の眼のように、夕やみの中で何百、何千もの灯をまたたいている。西はまた西で、どぎもをぬくように、とあるビルの屋上高くしつらえた、バカでかいネオンの広告だ。火のような赤と、燐のような青で、Light, Heat, Power!<sup>註13</sup>

さまざまな車の海をかき分け、色とりどりの服装をした、肉体をひけらかす男や女の海をかき分け、車は前進する。機械の騒音、ガソリンの臭気、女体の発散する香気、ネオンのまっ赤な光—悪魔のような都会の精霊のすべてが、遠慮容赦なく老人のおとろえた魂にのしかかる。<sup>註14</sup>

『子夜』の冒頭部分の上海描写である。この物語の時間的背景は、1930年5月から7月の設定になっている。「早産の近代化混血児」と上海を憎悪する表現があるが、茅盾は「第二の故郷」と呼んだ街への嫌悪感から物語を始めている。

この物語は、1930年春、世界恐慌が上海に波及、民族資本家は外資の圧力の危機を転嫁するため、労働時間を延長し、賃金の値下げをしたり解雇したり労働者を一層搾取した。これが労働者の反抗を招き、労働運動が政治闘争へと変化した。さらに蒋介石と馮玉祥・閻錫山の戦争で農村は疲弊し、農村での共産党の活動が政情を先行き不透明にした。こうした茅盾の時局認識から、半植民地の中国でブルジョアジーは、帝国主義に妥協し買弁化するか、封建勢力と妥協するかは道は無いという見解と農村から逃れた資金が都市の銀行へ、銀行は民族商工業への投資にこれを向けず、公債「投機」に走ったという金融状況の理解のもとに執筆されている。物語は民族工業資本家—呉荪甫と買弁金融資本家—趙伯翰との確執を軸に、呉荪甫の故郷双橋鎮の農民、自社工場の労働者との軋轢、家人の新旧世代の衝突が描かれる。

確かに五四以来、初めて小説に資本家、金融家が主役として登場し、経済、社会という題材の斬新さで話題を呼び、当時、議論された中国社会の性格についての論争に対する共産党員或いは共産主義者としての一つの回答、という点では評価されるべきであろうが、茅盾の意図は最初か

ら、民族ブルジョアジーに明日はない、上海という都市に明日はないという、革命のテーゼを創作に具現したという色彩の強いものであった。「白色の都市と赤色の農村の交響曲を小説に」<sup>註15</sup>、当初の構想は都市三部曲『棉紗』、『証券』、『標金（上海で使用された金塊）』と農村三部曲からなる壮大な創作計画であった。

1910年代中期（第一次世界大戦）から1930年代（第二次世界大戦）の間、上海は国際金融、貿易、商業、工業都市としてアジア最大の街に発展した（東京は軍都と化し閉塞状況。香港は未発展）。帝国主義列強の租界に育成された近代的諸システムは、上海人によって習得され運用されたし、またナショナリズム—政治的、経済的、文化的—が台頭し、外国人の特権に対する挑戦が各分野、各層から起った時代でもある。特に経済面では、民族資本による製糸、製粉、汽船、銀行証券、百貨店など諸業が力をつけ、外資と互角に競争するまでになった。茅盾はこの民族ブルジョアジーや民族産業を「明日はない」という観点から捉えた。茅盾が特に目の敵にしたのは証券取引所である。『交易所速写』（1936年2月）<sup>註16</sup>には、公債取引きに群がる人々の姿、電光掲示板の刻々と変化する数字が「人々の命運を握り」、「赤い電光の動きが彼らの破産或いは儲けを決定する」。そしてその刻々の変化に取引所内のホールの人々を一喜一憂させ、売り買いの叫び声が旋風のように潮の満引きのように荒れ狂い、「根も葉もないデマが取引所に入ると、公債の上り下がりの大風波が起る」と描写している。証券取引所を参観する以前、廬公館で公債相場を政治的に操る話、戦乱によって都市に流入した農村の金が銀行に預金され、公債「投機」に使われているという話などが強い先入観となって、冷やかかで否定的な記述となった。『子夜』の主人公—呉荪甫が工場などの資産を売却し、その資金で公債の仕手戦に出て破産するという物語の結末は、証券取引所＝投機ないしは「賭博」で、資本主義の悪という矛盾なりの図式があったからであろう。

王文英1999<sup>註17</sup>の『子夜』評価では、西側の資本家と上海の民族資本家は「政治上は侵略者と被侵略者だが、経済に於いては競争相手でもあり、パートナーでもあった」、民族産業の勃興と繁栄は上海等に「社会革命」を起こし、「この経済基礎から生じた変革は、中国数千年の封建的農業経済に打撃を与え、瓦解させ、新たに生まれた現代的な工業経済の基礎は日増しに増大した。そしてこの領域に発生した変化は、民族が前進する歩みを体現できたし、この領域の人物達—銀行家、企業家、商業者などもまた時代の先端にあった」が「この変化は当時流行していた各種のイデオロギーによって排斥された」と評しながら、茅盾は初めてこれらの「変化」と「人物」を『子夜』の題材としたと高く評価する。これは些か強弁であり、『子夜』は「変化」と「人物」を否定的側面から描写しているのである。また王文英1999は『子夜』の欠点として、民族ブルジョアジーが帝国主義、封建勢力、労働運動、原料基地・市場としての農村との矛盾の中で活路を模索する上で、「作者はこれらの矛盾の展開と解決の問題を表現する際、あまり正確ではなかった。それは彼が政治闘争の方式で経済問題を処理し、階級闘争の論理で経済問題を展開したからであ

る」とする。さらに金融資本家や証券取引所を全面的に否定している、と述べる。これらは全て現代の市場経済の時代観点から評価したと言わざるを得ぬものがあり、その評価自体は今日の時代性を表わすと言う意味に於いては意義深いものがあるが、1930年代の左翼文学の作品世界を今日的認識から論じるという違和感を覚える。むしろ『子夜』は、茅盾の創作意図とは別に、この時代の上海の繁栄や社会情勢を知るひとつの手がかりとして確認したほうがよほど価値がある。敢えて言えば『子夜』は政治小説と言った方がその性格を明確にできる。ここでこの作品の文学的価値を論ずるつもりはないが、少なくとも「1930年代の中国社会の壮大な絵巻」、「都市文学の佳作」という賛辞には肯首しかねることを記しておくに止める。

生活者としての茅盾が上海の街を「第二の故郷」と感じていた事とは別の角度—文学者として客観的にこの大都市を活写している作品の一つに「帝国主義の半植民地であり資本主義の総本山である上海」に対する嫌悪を綴った、『上海—大都市之一』（1935年3月、単行本として出版）<sup>註18</sup>がある。この作品は小説体となっている。老祖父が孫の青年を連れて上海に遊びにやってくる。これを上海在住の長男夫婦、次男夫婦とその子供たちが迎え、その会話の中で上海の歴史、現状を語らせるというもので、内容的には「上海小史」、「上海近代史教科書」になっている。ここで租界の成り立ちと現状、いかにして帝国主義列強が租界を中心にこの街を造ったか、上海人がいかにしてこれに抗したかが数字などを挙げて詳細に語られる。そして上海の繁栄は戦争のたびに逃げ込んだ資金と人が作り上げたとする（「一、祖父から孫三代」、「二、六十年前の上海」、「三、上海の特殊地位は如何に造られたか」）。さらに北京路一带三、四十行の銀行街を見学し、「これらは皆中国人の資本だ！なのに何故多くの中国の工場は資金が足りず、倒産するものもあると言われるのだろうか？」と言わせ、証券交易所の喧騒を描き、次に楊樹浦の工場地帯に足を運ぶ。「全上海各工場の資本総額はおよそ3億2千万元で、うち中国人が経営する工場は1億元余り、日本人経営の工場の資本は1億5千万元。日本人の上海での経済勢力は中国人の1.5倍だ！」、中国人が経営する工場からは「このごろ多くの煙突から煙が出ない状態」と嘆かせる（「四、熱狂的な投機市場と煙のでない煙突」）。「五、ハトの籠」では居住条件の悪さを述べる。そして「六、上海の将来」で上海特別市政府の「大上海計画」を話題にし、新たに商業区や中心区を設けずとも租界を取り戻せばよいと語らせる。租界との共生を図ろうとした市政府とは立場を異にする。

租界は歴史的には、確かに帝国主義列強の中国の主権に対する蹂躪、民族的侮辱であったが、そこでは中国人が西洋近代を擬似体験する「学習」の場でもあったし、言論の自由、出版の自由が保証され、左翼文化や運動を含めた様々な活動が生まれた。また清朝政府、北洋軍閥政府、蒋介石政権の支配が及ばぬ安全な地区であった。ゆえに近代出版業や新聞業がこの租界で発展し全国に影響を持ったのである。茅盾の上海生活は、租界は避難先だけではなく、商業資本や市場に支えられた出版業を育んだその恩恵の賜物である。租界と「上海」を民族主義、共産主義者として強く否定しながら、実はその受益者でもあった。

1941年12月8日、日本軍は共同租界、フランス租界を占領、1943年1月、汪精衛政権によって租界の回収が行われたが、実際に中国人の手に戻るのは日本の敗戦後のことである。歴史は皮肉なもので、半世紀後、中国人自らの手で「経済特別区」という経済租界を誕生させ、市場経済に移行した。証券取引所の再開により、株式投資、公債投資も復活したし、外国銀行や外国企業も全中国に30万社以上（合併も含む）展開する。茅盾が思い描いた近代的な上海は、全く違う手法で復活し、発展し続けている。

「住みにくい。住んでみて、住みにくいのが、よくわかりました。家や食べものなどで住みにくいではありません。もっとちがう、うまくいえない住みにくさなんです…」

『子夜』の主人公呉荪甫の妹、田舎から戦乱を逃れ上海にやってきた呉蕙芳の言葉<sup>註19</sup>である。兄との確執があつての事だが、象徴的で印象深い言葉である。

2001年3月記

#### 註

- 1 『我走过的道路』(中)「亡命生活」茅盾 1984年5月 人民文学出版社 18-48頁
- 2 『薄明の文学』中国のリアリズム作家・茅盾 松井博光 1979年10月 東方書店 29頁
- 3 『我走过的道路』(中) 3頁
- 4 『現代中国文学6 郁達夫・曹禺』岡崎俊夫訳 1971年12月 河出書房新社
- 5 『我走过的道路』(下) 24頁
- 6 同上 407頁
- 7 『我走过的道路』(上) 172頁
- 8 『上海弄堂』「弄堂沿革」罗小未・伍江主編 1997年2月 上海人民美術出版社 8-12頁
- 9 『从上海发现历史』忻平著 1996年12月 上海人民出版社 337頁
- 10 『上海歴史ガイド』木之内誠編著 1999年6月 大修館書店 114頁
- 11 『我走过的道路』(中) 182頁
- 12 『我走过的道路』(下) 407頁
- 13 『現代中国文学2 茅盾』竹内好訳 1970年10月 河出書房新社 5頁
- 14 註13に同じ、11-12頁
- 15 『我走过的道路』(中) 91頁
- 16 『交易所速写』(原載『良友图画杂志』第114期 1936年2月)、『茅盾散文速写集』上 1980年12月 人民文学出版社 273-276頁
- 17 『上海現代文学史』王文英主編 1999年6月 上海人民出版社 207-216頁

18 『茅盾文集 第11卷』散文一集 1986年 人民文学出版社 337-373頁

19 註13に同じ、338-339頁

参考文献：

- ・宋炳辉著『茅盾：都市子夜の呼号』 2000年5月 上海教育出版社
- ・木之内誠編著『上海歴史ガイド』 1999年6月 大修館書店
- ・王向民「茅盾住过的地方」『茅盾研究』第二輯 270-272頁 1984年12月 文化艺术出版社
- ・孫中田、査国华編『茅盾研究資料(上中下)』中国現代文学資料汇编(乙种) 1983年5月  
中国社会科学出版社
- ・石頌九主編『上海市路名大全』(増補本) 1989年12月 上海人民出版社
- ・古厩忠夫、高橋孝助編『上海史』 1995年5月 東方書店